

アムスルだより

No.52 2001年11月11日

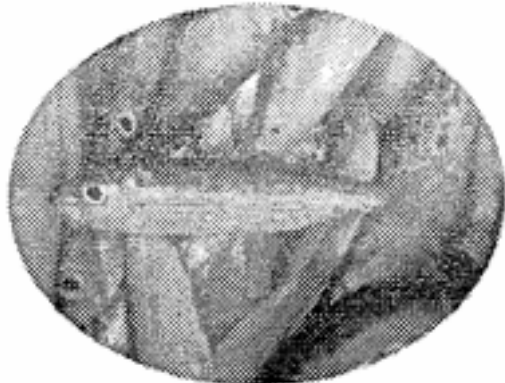
Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



なぜ群をつくるのか?

-イワシの仲間-

10月の上旬ぐらいからでしょうか、港の中にミジユンの大群が入り込んでいるのは、みなさんもうご存じのことでしょう。毎日どんどんつり上げられていますが、まだ黒々とした群が波の下でうねっています。今回は、このミジユンの話をしましょう。

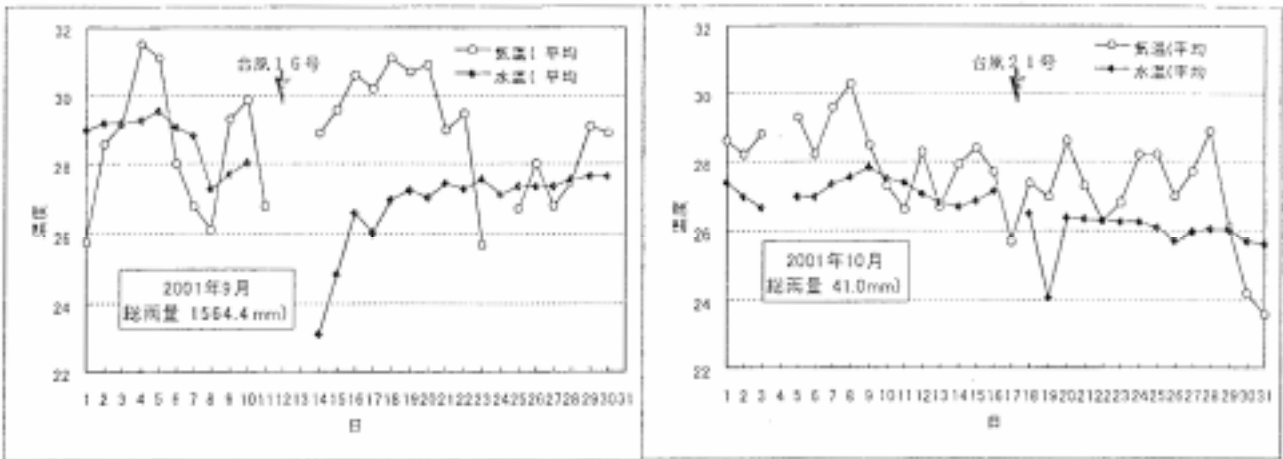
先ほど「大群」と書きましたが、このミジユンたちは、群をなし、海中のプランクトンなどを食べて生活している魚です。肉食のカツオは、このミジユンの群を見つくとこれを取りかこみ、すばやく泳ぎながらその群を小さく縮めていき、そしてついには、水面に盛り上がるほどに密度が濃くなったところで、おそいかかって食べていきます。

こんな風に食べられるくらいなら、最初から群など作らず、バラバラにいらしていればいいのに、なぜミジユンは群を作るの

でしょうか。昔から考えられているのは、「群を作ることによって1匹の大きな生き物に見せて他の動物をおどかし、身を守ろうとしている」という説です。けれども、先ほどのカツオの例のように、1カ所に集められてバクバク食べられてしまっていますから、かえってカツオに好都合で、ミジユンにとっての得は、この説ではうまく説明が付きません。「群を作ると、たくさんの目でまわりを見ることができるので、敵をより早く発見できる」と考えた人もいます。しかし、敵を早めに見つけたところで、カツオより泳ぐのがおそいので、逃げきれるとは思えませんし、大きな群は、むしろ見つかりやすくなってしまいうでしょうから、これも理屈に合いません。

実は、なぜミジユンが群を作るのか、その理由はまだはっきりしていないのです。ただし、すこし納得のいく説が一つあります。それは、「うまく子孫を残すため」という説です。ミジユンも、子孫を残すためにはオスとメスが出会わなければなりません。あまり泳ぎ回らないならば相手をさがすのも、そう大変ではないかもしれませんが、ミジユンのように大海原を泳ぎ回っている魚が、もしバラバラにいらしていたら、相手の見つからないうちに死んでしまうか

阿嘉新港での定点観測



もしれません。群を作っていれば、相手をさがす手間もなく、うまく子孫を残せるでしょう。とはいえ、本当は他に理由があるのかもしれない。「なぜミジュンは群を作るのか」、もし良い考えが浮かんだらぜひ教えてください。

ところで、みなさんの中には、「ミジュン」は方言だと思っている人もいるでしょう。たしかに「ミジュン」は方言なのですが、もう一つの「ミズン」という言い方は、実は正式な魚の名前で、今港にいるのは、大部分がこのミズンです。マイワシと同じニシン科の魚で、日本では沖縄で初めて見つか、そこで呼ばれていた名前がそのまま正式な名前になったのでしょう。沖縄本島のまわりでは、毎年夏の半ば過ぎから秋にかけて海岸に押し寄せますから、きっと昔から大切な食料として、人々に食べられていたに違いありません。子孫を残すための大切な群ですから、取りつくすわけにはいきませんが、釣ったり、小さなたも網ですくって、季節の魚を味わうのは大切なことだと思います。私たちもおいしくいただきました。みなさんも・・・もう、食べてますね。

阿嘉島の海より

-白化現象再び-

3年前の夏、島のまわりのサンゴが真っ白になってしまったのを覚えている人も多いと思います。同じ現象が今年の夏また起きてしまいました。主な原因は高水温だと言われています。サンゴの白化現象<はっかげんしょう>です(白骨化現象ではありません)。沖縄本島のように、場合によってはサンゴ礁を全滅させてしまうサンゴ礁の一大事です。ただ、真っ白になっているので骨だけになって死んでいると思っている人や、白化したサンゴはそのうち必ず死んでしまうと思っている人も多いのではないのでしょうか？でも、そうではないのです。白化したサンゴはちゃんと生きていますし、水温が下がって環境がよくなればもとどおり元気なサンゴに戻ることもできます。そう言えば、3年前、島のまわりのサンゴもほとんどが白化してしまいましたが、気が付いたらもとに戻っていたでしょう？今年の白化現象でも一部のサンゴは死んでしまいましたが、ほとんどは回復することができました。慶良間の海が健全だからこそのような危機にも耐えられたのだと思うのです。この世界的にも貴重な慶良間のサンゴ礁をいつまでも保っていききたいものです。